

特定非営利活動法人ぷれいす東京

三輪 岳史

初のオンライン開催となった第 23 回国際エイズ学会では、特に「Panoramic view of drug use and HIV」のセッションで、薬物使用と HIV/AIDS に関する最新の研究が報告されていた。筆者の口頭発表も本セッションに含まれており、「Associations of recreational drug use with HIV-related sexual risk behaviours among men who have sex with men in Japan: results from the cross-sectional LASH study」というタイトルで、日本国内の MSM における薬物使用と性行動との関連について発表した。本研究では、薬物を使用する MSM は、そうでない MSM と比べて HIV 感染リスクの高い性行動を行っているということが示唆された。オンデマンド形式の口頭発表であったため、質疑応答を通じた議論は実現できなかったが、本セッション内の他の発表を通して、各国の薬物使用と HIV/AIDS に関する研究を知ることが出来た。

まず、薬物使用によって、抗 HIV 薬によるウイルス量の抑制が制限されるというアメリカの研究報告があった。自身が携わっている研究では、日本の MSM の薬物使用者の多くは HIV 陽性者であることが示唆されているため、本研究報告を聞き、薬物使用や依存症の予防・治療に係る介入は、国民全体だけでなく、HIV 陽性者に対象を絞ったものも必要だと強く感じた。また、カンボジアでは社会的に脆弱な立場にいる人々（夫と離婚／死別した女性、ホームレス、低い教育レベル等）は HIV と HCV の合併率が高いという報告があった。一方サンフランシスコでは、少数派の人種（アフリカ系、ヒスパニック系）は、白人と比べて HIV のスティグマを強く感じており、そして HIV のスティグマが強い層ほど、PrEP に関する正しい情報を持ち合わせていない傾向があるという研究報告があった。日本においても、社会的少数派と性の健康の関連についての研究がより盛んに行われることを期待したい。

特に興味深かったのは、ブリストル大学の Adam Trickey 氏による口頭発表である。本研究はウクライナのハームリダクションに関するものであり、人口の 1%が薬物使用者である当国では、NGO が中心となって注射器交換プログラム等のハームリダクション事業を実施している。調査対象となった薬物使用者の 21.5%は HIV 陽性者であったが、HIV 陽性の薬物使用者は、それ以外の薬物使用者と比べて NGO のサービスを利用している割合が高かった。こうした NGO のサービスを利用している人は、そうでない人と比べて HIV の検査割合が高く、コンドームや清潔な注射針への利用割合も高かった。また、HIV 陽性の

薬物使用者のうち、NGO のサービスに繋がっている人は、そうでない人と比べて適切な抗 HIV 治療を受けている傾向が高かった。

本研究の結論としては、薬物使用者に対する NGO のハームリダクション事業は、HIV の予防と治療双方に貢献しているということだったが、これは筆者が所属している日本の NGO/NPO の活動に大いに参考になると考えられる。ハームリダクションの概念がまだ十分に浸透していない日本では実施出来る活動に限界があると思われるが、NPO による薬物使用者への支援（自助グループ活動、医療・福祉に係る社会資源の調整等）は、HIV の適切な予防や治療に貢献するだろう。本学会で得た知見を参考に、日本国内の NPO として行えるハームリダクション活動を模索しつつ、そうした活動の効果を量的・質的に評価する研究計画も立案していきたい。

本学会では、筆者が関わっているテーマ以外にも、HIV/AIDS に関する最新の知見を多様なオンラインコンテンツを通して得る事が出来た。例えば、本学会では「Virtual DAILY」というプログラムが YouTube で連日公開され、HIV/AIDS 領域の専門家のインタビュー動画が紹介されていた。特に初日は、昨今の注目トピックである COVID-19 と HIV/AIDS に関する話題を専門家から聞くことが出来た。また、同様に「Youth Force Daily」も連日公開され、HIV/AIDS に携わる世界各国の若者たちがビデオ電話を通し、若者ならではの課題についての議論が行われていた。こうしたコンテンツがオンデマンド形式で学会終了後も継続して観られるというのは、オンライン学会ならではの良さだったと思う。

今回、エイズ予防財団の助成金を活用して本会議に参加することが出来た。今後も NPO で活動する多くの研究者や実務家が、国際会議への参加を通して各国の HIV/AIDS に関する最新の研究や実践を知る機会を得て欲しいと思う。